

## (2) てんさいの褐斑病

てんさいの褐斑病は葉に直径数 mm 程度の斑点を生じ、多発すると葉全体が枯死し、糖量が減収する。令和4年は夏季の高温、多雨により本病の発生が多くなった。6月の気温が高く初発時期が早まった地域では発生が多かった。また、太平洋側の地域では降水量が多く、防除ができずに散布間隔が長くなった圃場もあり多発した。本病の一次伝染源は前年の罹病残渣から飛散する分生子と考えられており、本年発生が多かった地域では翌年の一次伝染源が多くなると推測されるため、発生に注意する必要がある。耕種的な対策としては、連作を避け、可能な限り抵抗性の強い品種の導入が有効である。

本病による減収被害を回避するためには、遅くとも初発直後までに薬剤散布を開始する必要があるため、地区の平年初発期や発生予察情報を参考にして散布開始時期を決定し、それ以前に発病が確認された場合には直ちに薬剤散布を開始することが重要である。また、QoI 剤や DMI 剤など多数の系統の薬剤で耐性菌の発生が確認されているため、薬剤の選択にあたっては防除ガイドを参考にし、マンゼブ剤を基幹とした防除を実施する。なお、マンゼブ剤の散布間隔は 14 日であるが、高温多湿の気象条件下では発病が急激に進展するため、抵抗性が“やや強”以下の品種では散布間隔を短くする。



写真 多発圃場と病斑(中央農試 山名 原図)